



沓野村の身分階層は、上州伊香保村にみられるような中世的な身分階層制を近世に持ち込み、幕末まで守り続けたような固定的なものではなく、判下層も本家の意向によるとはいえ、独立することができたものといえる。明治三年の同村の五人組帳の控えによれば、文化以前の別家は他人と見做して五人組の最後に記し、文化以降の新しい別家ほど本家のすぐ後ろに記すことになっているが、沓野村では、「家」の古さの序列が経済力よりも優先される面が強かったものと考えられる。実際上は一打と対等あるいは対等以上の経済力があっても、おそらくは、その家の新しさのゆえに身分的に本百姓の下とみなす村落の慣習があり、村独自の倫理感に支えられていたものと思われる。一打になるには、その村に「家」として存在して来た年月の長短も問題にされたのである。しかし同時に、抜きんできた資力も備えていなければ、やはり一打昇格は不可能であり、土地を所有することが必要条件であったことが石高帳から推測される。

近世末期の同村では、五人組は最寄りの組合わせではなく、一打百姓とその判下層をひとつの核として、その核がいくつつかまともって、ひとつの五人組を作っていて、ひとつの組の構成戸数が非常に多く、五〇戸以上の組もある。その他にも、五人組帳や宗門帳にはあらわれないが、水呑百姓も多数いたことは、判下層の性格を考える手掛りとなる。

強固な血縁関係を基軸とする近世末期の村落において、一軒前の「家」とは何かということに興味を湧くのである。

註(1) 拙稿「近世伊香保村にみる村落の身分階層制」(『地方史研究』一九一號、一九八四年一〇月)

(帝京大学・民俗学)